

国際シンポジウム「音／声の文化史」をめぐって

会期：2022年1月29日－30日

会場：オンライン開催 (Zoom)

王馨怡

数年のコロナ禍の感染対策でテレワークが普及し、遠隔会議で音声や画像の形でコミュニケーションを取りながら、世界中の人々とすぐに繋がる事が出来ている。その中で、カメラをオフにして、声だけで参加する人は多いだろう。音声の重要性がコロナの時代で高まっている一方で、様々な芸術ジャンルを通して表現・表象されてきた音／声と政治・文化・社会・メディアの関係について、再考の機会となっている。例年通り、今年に名古屋大学大学院人文学研究科附属の超域文化社会センター (Center for Transregional Culture and Society, TCS) の「音／声の文化史 (The Cultural History of Sound/Voice)」をテーマにした国際シンポジウムがオンラインの形で開催された。

今年の国際シンポジウム「音／声の文化史」は、名古屋大学大学院人文学研究科附属の超域文化社会センター、文科省科研費基盤研究 (A) 18H03568「建国初期中国を移動する身体芸術メディア・プロパガンダ戦時期からの継承と展開」(研究代表者：星野幸代)、一般財団法人伊藤忠兵衛基金研究助成「大学合唱団の歴史的展開と日本社会に関する研究」(研究代表者：河西秀哉)の共催で開催され、「国家・政治との関係性のなかで」、「境界領域・多文化との接触のなかで」、「ポピュラーカルチャー・大衆文化のなかで」、「新世代パネル 音と声の人文学：身体・メディア・サブカルチャー」という四つのセッションから音と声の文化史を検討することで、音と声は映像、歌、舞踏など様々なメディアと芸術活動を通して、ポピュラーカルチャーの時代の波にも乗り、国境を越えるということになってきた。去年の国際シンポジウム「メディア化された身体/引き裂かれた表象－東アジア冷戦文化の政治性」のテーマと結びつき、越境的音／声、身体、メディア、政治というキー概念に興味を持ちながら、私は二日間のシンポジウムに参加した。

初日の29日には、センター長の飯田祐子氏の挨拶と河西秀哉氏の趣旨説明のあとに、このシンポジウムの第一部のセッション「国家・政治との関係性のなかで」が設け

られた。このセッションは、日比嘉高氏 (名古屋大学) が司会、河西秀哉氏 (名古屋大学) がディスカッサントを務める中で行われ、政治的パロディとしての音楽、近代日本の学校の校歌と唱歌、国家による音楽の利用という三つの側面から音／声と国家・政治との関係を明らかにした。ノリコ・マナベ氏 (テンブル大学/スタフォード大学) は「アペー・ロード：ある時代の終わりにおける桑田佳祐の政治的パロディ」と題された報告で、「アペー・ロード」を例として音楽の政治性を論じた。須田珠生氏 (日本学術振興会) は「近代日本の学校にみる校歌の成立：文部省による唱歌への規制と学校における校歌受容」という発表の中で、「学制」が公布された1872年から1930年代頃までの校歌を対象にして、学校と文部省の立場からそれぞれの対応の変遷を分析した。芝崎祐典氏 (中央大学) は「音楽のための政治、政治のための音楽：ナチスドイツとアメリカ占領軍政府」の中で、ナチス期のドイツの音楽を例として挙げ、対外政策の面に注目し、政策的な面から政治・国家と音楽の関係と国家による音楽の利用を考察した。上記の報告からは、音楽は娯楽性だけではなく、その政治的構造と国家の関係も重要な側面だと教えられた。

29日午後の部は「境界領域・多文化との接触のなかで」をテーマにしたセッションⅡが設けられ、岩田クリスティーナ氏 (名古屋大学) が司会、星野幸代氏 (名古屋大学) がディスカッサントを務める中で進行された。このセッションは、日中戦争期と植民地時代に焦点をあて、当時「大陸」と呼ばれた中国、台湾、ソウルにおける音楽とその越境的特徴を論じた。葛西周氏 (早稲田大学) は「他者の声で歌う：ポピュラー音楽におけるナラティブの偽装」の中で、日中戦争期の日本における他の東アジア地域の流行歌と歌手の「声」と「歌手による代弁」という着眼点から議論した。トリスタン・グルーノ氏 (名古屋大学) は「荒城のゴーストハント：植民地時代ソウルにおける都市再生と反帝ポップ」というテーマをした報告の中で、都市空間の観点から、植民地時代ソウルにおける植民地主義と

反帝ポップ (Cultural resistance) を検討した。王櫻芬氏 (台湾大学) は「マスメディアを通じて境界を越えて歌う: 植民地時代の台湾における純粋のケース」の中で、臺灣コロムビア蓄音器 (Taiwan Columbia Records) のスター純粋をケーススタディとして分析し、音楽を媒介として、植民地時代の台湾と日本の緊密な関係を論じた。このセッションでは各発表者が、音/声はいかに国境を越えて、異なる文化と接触するかについて検討した。

午後のセッションⅢでは「ポピュラーカルチャー・大衆文化のなかで」をテーマに、日本とイギリスの大衆音楽文化に注目し、音楽、映像、身体、精神などについて新たなヴィジョンが見出された。司会の藤木秀朗氏 (名古屋大学) とディスカッサントの朱宇正氏 (名古屋大学) がこのセッションを進行した。輪島裕介氏 (大阪大学) は「声とからだの泣き別れ、そしてめぐりあい: 音盤と(で)踊る身体」をテーマに、近代日本大衆音楽史に着目し、具体的な身体や実演の場を獲得し、土着化させてゆくと主張した。広瀬正浩氏 (相山女学園大学) は「アンビエント・ミュージックをめぐる1990年代の日本の言説」と題された報告で、細野晴臣の言説を手掛かりにして、1990年代のアンビエント・ミュージックをめぐる日本の言説について考察し、「アンビエント」という概念、事象、イメージのありようを検証した。ジュリー・ロバルゾ・ライト氏 (ウォリック大学) は「音と映像: デヴィッド・ボーイの映画とビデオのスターダム」という報告の中で、音楽と映像に関連付け、スターダムとジェンダーの視点からデヴィッド・ボーイの映画とビデオを紹介した。映像学を専攻とする私にとっては、映像における音声・音楽は重要な研究対象であり、大衆音楽文化との関係を興味深いと思った。

30日の午後には、このシンポジウムの恒例である大学院生の企画による「音と声の人文学: 身体・メディア・サブカルチャー」というテーマの新世代パネルが設けられた。今年の新世代パネルは、名古屋大学超域社会文化センターのリサーチ・アシスタントの高畑早希氏と私が企画・司会を務める中で行われた。このパネルの趣旨文を作成する際に、サブカルチャーやポップカルチャーで生み出される音と声が、様々なメディアを通じて私たちの身体感覚をどのように構築してきたかという問いを巡って、「音と声の人文学: 身体・メディア・サブカルチャー」というタイトルをつけた。メディアにおける音と声の研究を調査しながら、2020年に『日本のアニメと声優のメディア史』(青弓社)の中で、石田美紀氏 (新潟大学) が考察

した女性が少年役を演じる日本の声優文化に興味があって、石田氏にディスカッサントをお願いした。今年の若手報告者は、映画・映像・ライブ・アニメに注目し、多様な角度から音/声とその社会・歴史・文化背景との関連を追究した。梶川瑛里氏 (名古屋大学・ウォリック大学) は「演じること/歌うこと: 映画とテレビにおける薬師丸ひろ子の視聴覚的イメージ」という報告の中で、薬師丸ひろ子の「歌うこと」を通して、メディア横断的な視聴覚パフォーマンスに内包される意味を考えることで、流動的な移動が要請されるメディア的環境において、異なる領域で活動することの意味と身体とパフォーマンスの関係について分析した。ケッレ・ガムゼ氏 (名古屋大学) は「コロナの時代の愛: COVID-19がヴィジュアル系のファンと芸能人の関係に与えた影響」をテーマに、ACMEという視覚系バンドのライブハウスの演出とオンラインのライブ配信を例として挙げながら、コロナはいかに視覚系バンドの演出とファンの反応に影響を与えたのか、という質問に注目し、サブカルチャーのファン研究について研究した。林緑子氏 (名古屋大学) は、モノが人になるときというテーマで、アニメ産業とジェンダーの視点から人気アニメ『ヴァイオレット・エヴァーガーデン』におけるメディアを通じた女性の声を発表した。発表はそれぞれに興味深いトピックを扱っており、サブカルチャーやポップカルチャーをめぐる音と声の研究の新たな展開が期待される内容であった。

音/声の文化史
29 (Sat) 30 (Sun) Jan. 2022
The Cultural History of SOUND/VOICE

「同時通訳」(通英・日英)
ADMISSION FREE PRESENTATIONS REQUIRED
SIMULTANEOUS INTERPRETING
ENGLISH/JAPANESE

開会の辞 OPENING REMARKS [29日] セッション1 国家・政治の関与性の中で
Time: 29th, 09:45-10:00 JST. Booth/Voice Introduction SESSION 1
with Nation/Politics

セッション2 遠景探検: 文化の境を越えて
SESSION 2
Journ. Field in Interdisciplinary and Multicultural Context

セッション3 ポピュラーカルチャー
Sound/Voice and POPULAR CULTURE
SESSION 3

新世代パネル 音と声の人文学: 身体・メディア・サブカルチャー
NEW GENERATION PANEL
Sound/Voice and Body, Media, and Subculture

総合討論 ROUNDTABLE DISCUSSION
閉会の辞 CLOSING REMARKS

TCS国際シンポジウム TCS International Symposium

最後の総合討論では、二日間の各報告に対して、多様な角度から議論しながら、質問応答が行われた。議論は、河西秀哉氏の司会で進行した。音声に関する活発な議論に刺激を受けた。その中で、占領期のラジオ政策、台湾と日本におけるレコード会社の録音の違いと共通点、朝鮮半島・日本・中国で流行したレコード、身体と声の関係、音と声の区別などの質問について、報告者と参加者は自分の研究と専門に基づいて、文学・歴史学・メディア学・映像学・文化学などさまざまな視点から議論した。音／声は流動的なモノであり、グローバルな政治的構造の中でトランスナショナルという特徴を持っていると考えられる。議論の最後に、センター長の飯田氏は、「ナラティブとして構成された音の文化と感性」について指摘し、音声に関する研究の多様な可能性を示した。

今回のシンポジウムは音／声の文化史を中心に展開されたが、それに限らず、多様な視点と学際的アプローチから音／声について考えられる。その報告と議論のまとめとして、主に三つの論点が下記のように述べられる。

一つ目は音楽と国家・政治との関係性である。音楽は娯楽だけではなく、国の政策によって構築されたものである。同時に、音楽は越境的なものであり、メディアを通して異なる地域・国家で変容していく。例えば、芝崎氏はナチス期のドイツの音楽を例として挙げ、音楽の視点から国家の政治的構造を分析した。また、王櫻芬氏は植民地時代の台湾と日本における純粋のケースを考察し、音楽による国と国の緊密な関係を強調した。

二つ目は音／声と身体の関係である。特に新世代パネルでは、テレビ・アニメ・オンラインライブなど多様なメディアを通して、スター、声優、アニメのキャラクター、バンドはいかに音声と身体を結びつけたか、という問いを追究した。最後の総合討論の際に、音と声の違いによって、非／具現化された音声 (dis/embodyed sound) についての議論も非常に盛り上がった。

三つ目はポピュラーカルチャー・大衆文化の中の音／声である。植民地時代から現代まで、大衆文化は流行曲や他の音楽の土台として、録音技術のおかげで、社会を占める多くの人々に広く知れわたる。その流行曲は、当時の社会・政治・文化・経済・歴史的分脈を示すだけでなく、人々の生活・精神状況も示唆するだろう。

上記の三つの論点を踏まえ、今年のシンポジウムは音／声の文化史という切り口から、音／声とメディア・身体・大衆文化・国家など多方面から充実に検討を行った。

新世代パネルの企画者とシンポジウム全体の参加者として、非常に貴重な経験ができたと感じた。